

## 和刻本『世説新語補』の書入三種

稲田 篤信

### 一 はじめに

『世説新語』は竹林の七賢人や王羲之など、後漢及び魏晋の名人の逸事逸聞を集めた中国古典名著として名高い。五世紀、南朝宋の臨川王劉義慶によって撰述されたものであるが、明代に王世貞が宋元の人物記事を補訂して、『世説新語補』が刊行されたことも知られている。しかし、中国では『世説新語』に比べて、その評価は低く、近年の張心澂『偽書通考』<sup>①</sup>に見られるように、明一代の著名文人に仮託した続撰書の一つとして扱われているに過ぎない。一方、わが国では明版清版の伝本は多く、元禄七（一六九四）年には和刻本が刊行され、安永八（一七七九）年にその「校正改刻」本が刊行されて、こちらの方が広く読まれた。大田南畝が「菅原道真や空海の昔から世説（『世説新語』）が行われて久しいが、近世、王弼州（世貞）の補本（『世説新語補』）が大いに行われて、古世説は廃れてしまった」（恩田仲任編『世説音釈』跋、主旨）と述べているように、世説といえばむしろ『世説新語補』を思い浮かべるのが通例であった。

和刻本『世説新語補』の元禄版、安永「校正改刻」版は、いずれも京都の林九兵衛の刊行である。この本には、以下に見られるように、内題（本文巻首題、以下巻首題）その他に近世日本の思想界に大きな影響を与えた李卓吾の名が冠せられ

て、「李卓吾批点」を称している。しかし、和刻本が底本とした明版李卓吾批点本とは具体的にはどのような本であるか、また安永版は元禄版をどのように「校正改刻」したか、その実態は明らかではない。

わが国に伝存する漢籍には、和刻本を含めて、上欄や行間に書き込みのある本が多い。和刻本『世説新語補』の伝本もその例に漏れない。現在までに私が気づいているのは、那波魯堂、中井履軒、石島筑波、秋山玉山、服部南郭、太宰春台、千葉芸閣、尾藤二洲らが関与したものである。<sup>2)</sup>今回はこのうち、那波魯堂、石島筑波、秋山玉山らによる書き入れ本を紹介し、これを手がかりにして、和刻本の底本と校正改刻の問題にアプローチしてみたい。

## 二 那波魯堂

那波魯堂の説が書き入れられている本は、関西大学図書館増田渉文庫に蔵されている。元禄版和刻本に書き入れられている。この本について、増田渉氏は『雑書雑談』<sup>3)</sup>で以下のように述べている（主旨）。

本書『世説新語補』の序文によると、明の王世貞が、劉孝標の注した劉義慶の『世説新語』と明の何良俊の『語林』とを併せて取捨刪定したもので、李卓吾が批点を加え、張文桂が校注したということになっていて、それに返点、送仮名をつけて和刻したものである。手元の本には毎頁にわたって書き入れがあり、刻本の本文や注解、評の誤字、脱字を別本と校合して、訂正している。また別注、別解が欄外余白や付箋にびっしりと書き込まれている。誰の手になる書き込みであろうかとよく見てみると、岡白駒を先生と呼び、「魯堂云」とあるところから、那波魯堂、あるいは同門のだれかの底稿本ではないか。

那波魯堂、字師曾、字は孝卿。魯堂は号である。享保十二年（一七二七）生まれ。寛政元年（一七八九）九月十一日没。六十三歳。阿波藩儒。

魯堂は実弟の拙古堂奥田松齋とともに『左伝』の学問で知られる。『世説新語補』に興味を寄せたことを記す資料は、本書以外にはない。竹治貞夫氏の労作「那波魯堂」<sup>4</sup>には、世説の一語も現れない。考えられるのは、増田渉氏も述べているように、魯堂が学んだ岡白駒の『世説新語補觸』が引かれていることから、師の影響であろう。魯堂周辺で『世説新語補』の会説が行われていたことになる。

和刻本の概略を示すために、本書の書誌的な事項を以下に掲げる。

『世説新語補』大本二十卷十冊。朽葉色無地表紙。十冊全ての外題簽を欠く。第一冊の外題は「世説 壹」（墨書。以下冊数のみ）。本文は四周単辺。版面は二層に分けられ、上層の欄眉には、行六字の批点、批積が刻される。本文の行格は無界。九行十八字。注文小字双行。行十八字。板心は「批点世説補卷一 一」。白口。

本文以前に、以下のように、序、凡例、付釈名、目録がある（句読を省略し、西暦年を補う）。

- (一) 世説新語補序 嘉靖丙辰（一五五六年）季夏琅琊王世貞撰。 秣陵蔡拱日書（三丁。無界。五行九字）。
- (二) 世説新語序 万曆庚辰（一五八〇年）秋呉郡王世懋撰（三丁半。有界。五行十一字）。／乙酉（一五八五年）初春世懋再識（半丁。無界。十行二十五字）。
- (三) 刻世説新語補序 万曆丙戌（一五八六年）穉日沔陽陳文燭玉叔撰（三丁。有界。六行十三字）。
- (四) 李卓吾批点世説新語補旧序二首 五月既望梓成耘廬劉応登自書其端是為序／嘉靖乙未（一五三五年）歲立秋日也呉郡袁褰撰（二丁無界。九行十八字）。
- (五) 世説旧題一首旧跋二首 高氏緯略／紹興八（一一三八年）年夏四月癸亥廣川董弁題／淳熙戊申（一一八八年）重五日新定郡守笠沢陸游書（三丁。無界。九行十八字）。

(六) 何氏語林旧序二首 辛亥(一五五二年) 四月之望文徵明書／長洲陸師道撰(四丁。無界。九行十八字)。

(七) 李卓吾批点世説新語補凡例十則(二丁。有界。九行十八字)。

(八) 付釈名(八丁。有界。九行十八字)。

(九) 李卓吾批点世説新語補目錄(三丁。有界。九行)。

以上、(九)まで三十丁の通し丁が付されている。また、(四)の「李卓吾批点世説新語補旧序二首」以下目録までも、二層に分けられている。

卷首題は「李卓吾批点世説新語補卷之一」。その下には、「宋劉義慶撰／梁劉孝標注／宋劉辰翁批／明何良俊增／王世貞刪定／王世懋批積／李摯批点／張文柱校注」の八名の名が掲げられる。第十冊の卷末に、「乙酉春三月既望琅琊王泰亨識」の「題世説新語補後」がある。刊記は第十冊第二十卷末に「元禄七年甲戌八月之吉 京東洞院通夷川上町 林九兵衛梓行」とある。

関西大学図書館蔵本の封面(見返し)には、以下のような文章が書き写されている。今これを仮に魯堂のものとして、先の増田渉氏の文章同様、『世説新語補』の概要を知るための参考になるので、以下に書き下し文にして紹介する。

○ 王鳳州先生鑑定／李卓吾批点世説新語補／説補一編、清言妙緒、江左の風流と為す。東京に紹述する者をして、千  
万世一日の如くならしむ。一たび予章に刻し、再び呉郡に刻し、本堂に迄るまで三たび壽梨す。海内の賞音、劉玄  
靖の如き其の人は、請ふ、別眼を具へて、用ひて大観を拓かんことを。 書林余圮孺梓

「王鳳州先生鑑定」は横書き。「李卓吾批点世説新語補」は二行の分かち書き。「説補一編」以下の文字は、上掲(三)の陳文燭「刻世説新語補序」に見える語句をつなぎ合わせた文章で、おのずと本屋による内容案内になっている。「余圮孺」

は書肆である。これは、魯堂が和刻本の原本として想定した明版の封面の記事である。東京大学東洋文化研究所蔵本の『李卓吾批点世説新語補』二十卷二十冊に、この封面がある（後述）。

もう一つは次の五条の文である。

○ 按ずるに、世説新語は宋の臨川王義慶が晋末に生長して漢晋以来の佳事佳語を采擷して作る所にして、極めて精絶なり。序に説いて曰く、僅かに唯だ三十六篇世に伝ふる所釐（おさ）めて十卷と為す。或いは四十五篇と作して、更に六朝に及ばず。梁劉孝標、学んで既に該博、又異書を好む。従ひて之に註す。故に引証特に詳なり。又、劉辰翁之を批す。

○ 凡例に曰く、劉氏註往に、……義慶が為に亡を補ふ。是を以て顛古する者並重せり。

○ 何氏語林三十卷、明何良俊の編する所。劉氏世説に類倣して作るなり。説いて何氏語林旧序二首に詳し。蓋し両漢より昉（およ）びて胡元に迄るまで上下千余年、正史の列する所、伝記の存する所、奇蹤勝踐、漁獵して遺すこと靡し。凡そ二千七百余年事云々。

○ 世説新語補は明琅琊王世貞の撰する所なり。蓋し王氏少し時、世説新語の善本を得て、甚だ之を好めり。輒ち其の竟り易きを思ふ。又以為らく、六朝の諸君子は即ち持論する所の風旨寧ろ一二の称すべき所無らんや。最後に何氏語林を得て、大抵世説を規摹し而して稍や之を衍（の）べて元末に至る。然れども其の事詞の錯出して雅馴ならざる者を刪定し、表章して合せて一篇と為すなり。又、王世懋之を批釈し、李卓吾之を批点し、張仲立校注して全書と為す。卓老の批評、劉辰翁に視るときは、加（ま）すます詳らかなり。

○ 又、別に語林普の河東の裴啓子の作る所なり。事は十八卷二十四張、又、六卷六張に見ゆ。

以上の五条の内、最後を除く四条を私に要約すると次のようになる。

劉義慶が漢晋以来の佳事佳語を撰述した『世説新語』は比類ない名作である。三十六篇を十巻に収め、あるいは四十五篇とする。梁の劉孝標が註を付し、さらに劉辰翁が逸文を補い批校した。何良俊『何氏語林』は両漢から元に至るまでの逸事を博搜して二千七百余条を集めている。『世説新語補』を撰した王世貞は、若い頃、『世説新語』に興じて、読み終わるのを惜しんだほどであったが、六朝にも見るべき君子はおり、元末までの逸事を収める『何氏語林』から雅致の乏しいものを除いて、合わせて作ったのが『世説新語補』である。王世懋が批釈し、李卓吾が批点を加え、張仲立が校注を施して一書としたが、卓老の批評は、劉辰翁に比べると詳細である。

以上の文章も、『世説新語補』の前掲(一)から(七)までの序や凡例の要語、要文を摘記して成りたっている。那波魯堂が解題代わりに作ったものであろう。

最後の一条は『世説新語補』巻十八の二十四丁裏、および巻六の六丁表の本文および注に、「語林」や「河東裴啓」に言及するものがあることを指している。

増田渉氏は先の文章で岡白駒説が引かれることを指摘していたが、そのほか『万姓統譜』をよく引くことにも注意している。「余圯孺」版や王湛批点本を見ていることも本書の特色である。

### 三 菱荷園校本

東京都立中央図書館特別文庫室蔵の蜂屋文庫本『世説新語補』が石島筑波が元禄版『世説新語補』を用いて、書き入れを施している本である。<sup>5)</sup> 大本二十巻十冊。濃靑刷毛目表紙。外題「世説新語補 一 菱荷園校本」。王世貞、王世懋、王世懋(再識)、陳文燭、旧序二首、旧題一首旧跋二首、何氏語林旧序二首の序跋類があり、その後、凡例、付釈名、目録と続き、

本文に至る。巻首題、および明人著者名、王泰亨の題後、刊記、板心（「德行 批点世説補卷一 一」（德行は墨書）、いずれも関西大学図書館蔵本に同じ）。

本書の第十冊巻二十の最終丁二十四丁表に、朱書して「此本与諸校本讐対三四然未有免紕繆 芟荷園」とある。上層欄眉には「石正猗字仲縁号筑波又号芟荷園」と墨書してある。また、題後の末に朱書して「宝暦六丙子歳六月七日写焉 田惟孝」とある。芟荷園が石島筑波のことである。

筑波の伝は東条琴台『先哲叢談統編』巻八「石筑波」が筑波自書の譜牒ならびに年譜、鵜飼士寧の墓誌銘（鵜孟一「筑波先生墓誌銘」『事実文篇』巻三十一）、また江村北海『日本詩史』など諸書を利用して詳しいので、これに拠って人物を述べると以下のようになる。<sup>6)</sup>

筑波、名は正猗。字は仲縁。筑波山人。また字は子遊、号は穎川。本姓尾見。通称、与右衛門。服部南郭門。『芟荷園文集』がある。<sup>7)</sup> 寛永五年八月八日生まれ。父正数、母は横山氏。祖父正盛の代から浜松本庄侯に仕えたが、享保十五年、二十三歳、当路の人と事を議して容れられず、致仕して、京撰の間に浪遊した。京撰、名古屋、江戸を遊歴し、寛保壬戌駒込吉祥寺前で講説する。宝暦八年八月十七日病没。歳五十一。駒込養昌寺に葬る。「狂誕放恣、酒を嗜み客を好む。快意劇談、狂を発し気を吐き、傍らに人なきがごとし」とは、琴台の言である。

日野龍夫『服部南郭伝攷』<sup>8)</sup>は十度ほど筑波を取り上げる。享保十六年（一七三一）の条に『護園雑話』を引いて、市川団十郎や瀬川菊次郎、中村富十郎から頼まれた護園社中の書を偽ってみずから書いたことなど、筑波の奔放な人柄を伝えるエピソードを紹介している。ここでは筑波は奇人伝中の人物である。大まかに言えば、礼法に束縛されない護園風の自由な風流任誕の行動、また、時の人に軽率浮薄と批判された振る舞いである。しかし、筑波に近づいてみれば、彼なりに節を通して、人に譲らない気骨の人物像を読み取ることができる。彼が特に『世説新語補』に興味を寄せた理由も、あるいはこの辺にあったのかもしれない。

『護園雑話』には筑波が駒込の芝荷園において、舌耕のテキストとしていたのは「唐詩選滄溟尺牘」であったことを伝える記事がある。前者は李于麟の高名な撰書、後者は書簡集である。また、『護園雑話』は筑波が浄瑠璃本を見台に置き、漢籍の方は諳んじて語っていた姿も伝えている。当時こうした漢学者の売講のテキストに選ばれたのは、「世説唐詩選滄溟尺牘」が多かったことを高山大毅氏が指摘している。<sup>(9)</sup>南郭門人の筑波が講じた「世説」は、護園派が尊重した古世説である。しかし、『世説新語補』は魏晋以降の人物のエピソードを含み、明人の新しい批点批釈がつき、講釈にはさらに恰好のテキストであった。おびただしい書き入れの中には、漢語に国字解風の俗解を当てているものがあり、これなどは聴講者にわかりやすく届けようとする意欲と研鑽の跡として見ることが出来る。

本書は宝暦六年六月、「田惟孝」の書写にかかることが判明するが、この人物については未詳。筑波生前に写しているの、その門人であろうか。

#### 四 鹿鳴楼蔵本

次に鹿鳴楼を名乗る人物の蔵本(家蔵)がある。安永版本の『世説新語補』に太宰春台、服部南郭、秋山玉山、千葉芸閣らの説が朱墨青の筆で書き込まれている。煩雑ではあるが、元禄版本との違いを見るために、安永版の書誌的事項を繰り返して記す。

大本二十卷十冊。濃縹色雷文唐草表紙。外題「校正世説新語補 五六」(三冊目題簽。子持ち枠)。本文は四周单边。

(一) 世説新語補序 嘉靖丙辰季夏琅琊王世貞撰 秣陵蔡拱日書(三丁。無界五行九字)。

(二) 世説新語序 万曆庚辰秋吳郡王世懋撰(三丁半。有界。五行十一字)。／乙酉初春世懋再識(半丁。無界。十行二十五字)。

- (三) 刻世説新語補序 万曆丙戌種日陽陳文燭玉叔撰(三丁。有界。六行十三字)。
- (四) 李卓吾批点世説新語補旧序二首 五月既望梓成耘廬劉応登自書其端是為序／嘉靖乙未歲立秋日也呉郡袁褫撰(二丁。有界。九行十八字)。
- (五) 世説旧題一首旧跋二首 高氏緯略／紹興八年夏四月癸亥廣川董弁題。／淳熙戊申重五日新定郡守笠沢陸游書。(三丁。有界。九行十八字)
- (六) 何氏語林旧序二首 辛亥四月之望文徵明書／長洲陸師道撰(四丁。有界。九行十八字)。
- (七) 題世説新語補後 乙酉春三月既望琅琊王泰亨識(三丁。無界。六行十三字)。
- (八) 李卓吾批点世説新語補目錄(三丁。有界。九行)
- (七) 李卓吾批点世説新語補凡例十則(三丁。有界。九行十八字)。
- (八) 付釈名(八丁。有界。九行十八字)。
- (四) の「李卓吾批点世説新語補旧序二首」以下目錄まで、また本文の版面は二層に分けられ、上層の欄眉に六字の批点、批釈が刻されるのは元禄版と同じであるが、欄眉にいくつか界線が施され、下層の本文は有界の九行十八字であるのが大きく異なる。十八字の小字双行は同じ。刻字は彫り改められている。
- 巻首題は「李卓吾批点世説新語補卷一」。その下には、「宋劉義慶撰／梁劉孝標注／宋劉辰翁批／明何良俊増／王世貞刪定／王世懋批釈／李塾批点／張文柱校注」の著者名がある。第十冊の巻末に、「重刻世説新語補跋 皇和安永己亥正月守山碕允明謹撰」(二丁。無界。六行十二字)がある。元禄版で巻末にあった「題世説新語補後 王泰亨識」は、前に回された形である。
- 本書も順序こそ違え、元禄版同様、王世貞序、王世懋序、王世懋再識、陳文燭序、旧序二首、旧題一首旧跋二首、何氏語林旧序二首、凡例、目錄、付釈名を備える。ただ、元禄版では、丁付けが(一)から(九)まで、通し丁で付されていたの

が、(一)の王世貞序から(四)の陳文燭序までの十丁が通し丁、(四)から(六)の旧序旧跋七丁が通し丁、後序三丁と続き、目録三丁、凡例二丁、付釈名八丁がそれぞれ個別に付されている。巻首題下に五名の明人の名を掲げることが元禄版と同じ。板心は「批点世説補卷之一 一」である。

第十冊卷二十の本文の末尾に「辛亥春以太宰南郭玉山三先生及芸閣先生考標写了於小水街 鹿鳴樓藏」と朱書され、印(二尺心)がある。寛政三年の春、太宰春台、服部南郭、秋山玉山と千葉芸閣の四名の考を標写したとの識語である。

鹿鳴樓は、その人の伝を明らかに出来ない。『改訂増補漢文學者總覽』で鹿鳴の号を持つ人物にあたると、鳥取藩儒(江戸)、文化十三年、七十歳で没した土肥鹿鳴、周(秀)太郎が検索できる。<sup>10)</sup> 山田静齋門の江戸の儒者。辛亥を寛政三年と嘉永四年のいずれかと考えると、もしこの人物であるなら、寛政三年は四十六歳である。

本書にも無数に書き入れがあるが、「按」、「云」、「曰」に限って、按語批語の記事を拾うと、次のようなことが指摘できる。

太宰春台の按語は、「純云」、「春台云」、「太宰徳夫曰」、「春台曰」、「太宰曰」、「春台按」など九例。服部南郭の按語は、「服子云」、「服云」、「南郭曰」など四例。千葉芸閣の按語は、「玄之按」、「玄之曰」など十四例。他に、「潜按」、「秋杞曰」がそれぞれ一例。名を記さないで、「按」から始まるものが七十余例と最も多く、これが秋山玉山であろう。「秋杞」もあるいは玉山であろうか。以上の按語批語は一筆である。

以上から推測して、本書は秋山玉山の校注に春台、南郭、その他の人物の意見を取り入れたものに、玉山門の千葉芸閣の意見を加えたものと考えられる。玉山、名は儀、字は子羽。徳田武『江戸詩人傳』<sup>11)</sup>に伝がある。千葉芸閣、字子玄。玉山門。古河藩主の侍請を勤めた。寛政四年没。

本書の成立の事情、及び年次を細かく明らかにすることができない。日野龍夫氏は『服部南郭伝攷』寛延三年庚午(一七五〇)、南郭六十八歳の条に、この春、熊本侯細川重賢およびその儒臣秋山玉山、この年四十九歳、との交遊がはじめて開

け、没するまでの十年間、親しく交わったとあるので、このあたりが会読の時期かとひとまず想定しておく。<sup>12)</sup>

## 五 観濤閣蔵版

安永校正改刻本の一本に、観濤閣蔵版を称する本がある。東京都立中央図書館特別文庫室蔵本、国立公文書館内閣文庫蔵本の二本を確認したが、後者を例にとって概略をうかがう。<sup>13)</sup>

大本二十卷十冊。濃縹色無地表紙。外題「校正改刻世説新語補 一二（十九 廿止）」（止は墨書）。原題簽。左肩。子持粹。封面（見返し）「騰龍源公定本 観濤閣蔵／世説新語補／千里必究不許翻刻 常陽碕允明哲夫校」。

本文以前の構成は、王世貞序、王世懋序、王世懋再識、陳文燭序、劉応登、袁褰旧序二首、高氏緯略、董弁陸游旧題、文徵明、陸師道何氏語林旧序二首、凡例、目録、付釈名である。

巻首題は「李卓吾批点世説新語補卷之一」。明人著者名も他本に同じである。巻末に「重刻世説新語補跋 皇和安永己亥允明守山碕允明謹撰」がある。刊記は「元禄七年甲戌八月吉日／安永八年己亥正月吉日再刻 京東洞院通夷川上町／林九兵衛梓行」である。封面（見返し）に「騰龍源公定本」、「観濤閣蔵」とあるのが注意せられる。

後に安永版には観濤閣蔵本を称せず、京都の林九兵衛の刊記のみが残る本があるが、その理由は分からない。また、立命館大学衣笠図書館蔵本のように、第十冊後表紙見返しに「錦山柚木先生著／世説新語補系譜／附歴代帝王系譜 全二冊嗣刻 製本売弘所 京都間之町通御池上ル町 林権兵衛／大坂心斎橋南壺丁目 松村九兵衛／江戸日本橋南三丁目 前川六左衛門」とあるところから、後に版木が林九兵衛の手を離れて、前川六左衛門に移ったことが知られる。<sup>14)</sup> 無刊記本もある（明治大学図書館蔵）。

安永版に付された跋で、戸碕允明は『世説新語』が王世貞によって補訂を加えられ、小美（王世懋）が予章において刻し

て以来、『世説新語補』には刻本が多く、その中で李卓吾の批評本がもっとも広く行われていると述べ、本書は松平頼寛がみずから苦心して諸本を蒐閲して底本を作り、これを戸崎允明が預かって校訂を施したことを言う。

戸崎允明は字子哲。号淡園。十大夫を称する。常陸松川の生まれ。文化三年十一月十四日没。享年八十三。墓は巢鴨の東福寺にある。守山藩儒。平野金華門。騰龍源公とは、磐城守山藩主松平頼寛。観濤閣はその書齋。徂徠に傾倒した好学の大名として、本書以外にも『論語徴集覽』などの刊行に関わっている。日野龍夫『服部南郭伝攷』にしばしば名が現れる。松平頼寛の次子、「守山公子松平頼融」の誌した「淡園先生墓碣銘」(『事実文篇』卷四十二)によれば、允明は守山侯四世凡そ六十余年にわたって仕え、しばしば退隱を願ったがその都度慰留されたほどの信任ぶりであったという。<sup>15)</sup>

元禄安永両版の本文及び句読、和訓、批注の加除等、改正改刻の詳細については、今後の課題にしたいが、一覧すると、版面は元禄版の行格に忠実ではあるが、先述したように、文字は幾分丸みを帯びた整った字体に彫り改められ、本文には界線が施され、眉批には元禄版にはなかった訓点<sup>16)</sup>が施され、批注も新たに付加されたものがあり、元禄版の面目を改めている。允明の努力の跡がうかがわれる。

## 六 李卓吾批点本

和刻本『世説新語補』に付けられた序の内、王世貞の序は嘉靖三十五年、王世懋序が万曆八年(二五八〇)、同再識と続く。卷末の王泰亨の後題は万曆十三年乙酉である。陳文燭の序が書かれた万曆十四年を版刻の爲った年次として、この本は万曆十四年本として扱われる。

では、元禄和刻本が依拠した底本は、具体的にはどのような本であろうか。現在の所、結論としては不明とするしかないが、いくつかが手がかりを、以下に記して、後考に備えたい。

まず、先述関西大学図書館蔵本の封面（見返し）に記された「書林余圮孺」刊行による一本。東京大学東洋文化研究所蔵『李卓吾批点世説新語補』二十卷二十冊がこれである。「王鳳州先生鑑定」以下、「書林余圮孺梓」までの語句はこの本の封面にある。薄紙で包んだ内表紙という形になっているがため、魁星印ともう一つの印が読み取れない。本文以前に、劉応登と袁褰の旧序二首、董弇と陸游の世説の旧題一首旧跋二首、文徵明と陸師道の『何氏語林』旧序二首があつて、その後、凡例十則、目録、付釈名と続く。すべて有界、九行十八字である。つまり、この本には、王世貞序、王世懋世説序、王世懋再識、陳文燭序を欠く。

巻首題は「李卓吾批点世説新語補卷之一」。その下には、「宋劉義慶撰／梁劉孝標注／宋劉辰翁批／明何良俊增／王世貞刪定／王世懋批釈／李攀批点／張文柱校注」の八名の著者名が掲げられる。行格は本文有界九行十八字、注は小字双行字同であり、板心も「批点世説補卷一 一」であり、他本と同じである。第十冊の巻末にある「題世説新語補後 王泰亨識」が欠けている。序、本文すべてに薄い界線がある。批点は李、劉、王の三氏のものがある。

次に王能憲氏が紹介している一本。王能憲氏は『世説新語研究』第二章「世説新語」の版本、箋注と批点」において、明代の『世説新語補』系の版本を七種取り上げ、その中の「万曆十四年太倉王氏刻李卓吾批点世説新語補二十卷」について、「この本には巻首に焦竑の序があり（略）、焦序の後にまた王世貞、陳文燭、王世懋の序があり、また、劉応登、袁褰、董弇、陸游等の《世説》の序跋があり、そして文徵明、陸師道等の《何氏語林》旧序に及ぶ。序の後に《凡例》十則、並びに《釈名》を付す。巻末に王泰亨の後序がある。この本は日本でまたすこぶる流行し、安永己亥本はすなわちこれに拠って翻刻している」（訳）と述べている。<sup>16</sup>

焦竑は、焦弱侯。李卓吾の友人。『澹園集』四十九卷、『焦氏易林』、『焦氏筆乘』などがあり、『焦氏筆乘』は和刻本があつて、わが国でもよく知られた明代文人である。安永版本に焦竑序を収載している本はないので、王能憲氏に従えば、安永版はこの序を除いたものということになる。

焦竑序を持つ李卓吾批点本は二種類披見した。一本は台湾大学中央図書館蔵『李卓吾批点世説新語補』二十卷十冊である。書名は巻首題から採ったものであろう。冒頭に「世説補序」、末尾に「琅琊澹園焦竑撰書」とある一文が、焦竑の序である。<sup>(17)</sup>

もう一本は天津図書館蔵明万曆刻本『李于鱗批点世説新語補二十卷附积名一卷』八冊本である。この本は、焦竑の序の後に、王世貞、王世懋、陳文燭の序、旧題旧跋を並べ、文徵明の何氏語林旧序を削って、以下に积名、凡例、目録をつないでいる。

本書の大きな特色として、巻首題を「李于鱗批点世説新語補卷之一」とし、巻首題下著書名も第四冊巻五までは李卓吾を李于鱗に彫り改めている。しかし、なぜか同巻尾題以下には李卓吾の名をそのままにしているほか、「李□吾」と彫り残しの箇所すら見られる。本屋の戦略として、李卓吾もさることながら、同じ李なら、当時著名の李于鱗の名を冠する方がよいと思ったのであろう。<sup>(18)</sup> 封面には「劉須溪先生纂輯／世説新語補／梅野石渠閣梓」とある。須溪先生は劉辰翁のこと。石渠閣が版元であろう。『中国古籍版刻辞典』によれば、万曆年間の王世茂の室名という。王世貞輯、酈道元補の『匯書詳注』三十六卷、李摯評『忠義水滸伝』百卷等を刻印したとあるが、この人物であろうか。このように李卓吾批点本に焦竑の序を加えた『世説新語補』の伝本はいくつかあり、王能憲氏説の一本もその一つであろう。

もう一つのてがかりは、国立公文書館蔵本の一本(子一九〇—二)のように、王世貞序、王世懋序、同再識、陳文燭序、凡例、目録、付积名と続き、巻首題「李卓吾批点世説新語補卷之一」の下に、宋劉義慶撰、梁劉孝標注、宋劉辰翁批、明何良俊増、王世貞刪定、王世懋批積、李摯批点、張文柱校注とあり、巻末に王泰亨「題世説新語補後」がある本である。これは幾分匡郭を小さめに作っているが、安永版和刻本と版面がよく似ている。しかし、和刻本の有する旧序旧跋を欠き、焦竑序をも欠く。

以上のように、序を比較しただけでも、明版の李卓吾批点本で元禄版、安永版のいずれにせよ、和刻本にそのまま合致す

るものはない。また、冒頭部分を一覽しただけの判断であるが、和刻本と合致する眉批を備える本に行き当たらない。和刻本（特に安永校正改刻本）は、李卓吾批点本以外を含めて、諸本を渉獵して新たな批注を付している。

## 七 護園社中と『世説新語補』

『世説新語補』にかかわる人物について、補足しておきたい。<sup>(20)</sup>

陳文燭は『歷朝小伝』に、字王叔。沔陽の人。嘉靖乙丑進士。『五岳山房集』がある。刻字は玉であるが、『歷朝小伝』には王に作る。劉応登は、『江西通志』に、劉応、字堯咨。安城の人。袁褰は『歷朝小伝』に、字尚之。永之の兄。石啓齋に宋刻書を蔵す。文徵明は『明史』に伝がある。著名の善書。陸師道は、『歷朝小伝』に、長洲人。嘉靖戊戌進士。『明史』に伝がある。何良俊は字元朗、華亭の人。『何氏語林』のほか、『四友齋叢説』がある。王世貞は字元美、大倉の人。『明史』列伝百七十五。王世懋は字敬美、嘉靖三十八年進士。世貞の弟。李攀は『歷朝小伝』に、字宏。甫晋江の人。『明詩選』には「李攀字李卓吾」とある。張文柱は『歷朝小伝』に、字中立。崑山の人。

王世貞、李于鱗（李攀龍）はともに後七才子の中心人物であり、荻生徂徠、およびその一門が親炙した古文辞派の文人であるのは、言うまでもない。焦竑は先述。伝は『明史』文苑伝四にある。

わが国の魯堂はさておいて、岡白駒、石島筑波、秋山玉山、服部南郭、太宰春台、戸碕允明、松平頼寛など、『世説新語補』に興味を寄せる人たちは護園派、あるいは護園に関わりのある人物が多い。『世説新語補』は護園社中にとって、古世説同様、大事な本であった。徂徠が弟子の木下公達に示した「示木公達書目」（『荻生徂徠全集』第一巻）に、「右吾党学者必須備坐右不可欠一種」、すなわち護園の机辺に備えておかなければならない「必讀書リスト」（同解題・凡例）に、『世説新語補』が上げられている。<sup>(21)</sup>

以上の三種の書き入れ本の個々の特質について、また、那波魯堂や護園の人々の『世説新語補』に寄せる関心のありかについては、紙幅が尽きたので、今回は概略の紹介にとどめ、後日を期したい。

注

- (1) 張心激は、明世の偽作の習いとして、王世貞に仮託したものとす。『偽書通考』一九六二年、商務印書館、一〇七三頁。
- (2) 那波魯堂、石島筑波、秋山玉山らの関与した『世説新語補』については、後述。中井履軒『李卓吾批点世説新語補二十卷』（和刻本。中井積徳雕題、大阪大学付属図書館懷徳堂文庫蔵）、尾藤二洲『世説新語補』（清版二種。いずれも国立公文書館内閣文庫蔵。昌平坂学問所本）。
- (3) 増田渉『雑書雑談』一九八三年、汲古書院、一三九〜一四二頁。関西大学図書館増田文庫蔵の『世説新語補』（LM2―136）は登録者書名。後述の東京大学東洋文化研究所蔵本（子―雑―4）は『李卓吾批点世説新語補』（封面題）。
- (4) 竹治貞夫『近世阿波漢学史の研究』第三章「那波魯堂」一九八九年、風間書房、一三七〜二九九頁。
- (5) 東京都立中央図書館特別文庫室蔵蜂屋文庫『世説新語補』（特七六九三）。
- (6) 東条琴台『先哲叢談続編』一、一九一七年、国史研究会、八一〜九二頁。五弓雪窓編『事実文編』卷三十九「筑波先生墓誌銘 鶴孟一」（『関西大学東西学術研究所資料集刊十一』三 事実文編三）一九八〇年、関西大学出版・広報部、四三〜四四頁。
- (7) 『菱荷園文集』（明和七年七月跋刊、『詩集日本漢詩』十四所収、一九八九年、汲古書院刊、三三三〜四〇七頁）。
- (8) 日野龍夫『服部南郭伝攷』一九九九年、ペリかん社、二三八頁。
- (9) 高山大毅『滄溟先生尺牘』の時代―古文辞派と漢文書簡』（『日本漢文学研究』六、二〇一一年、二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム 五八頁）。徂徠学、及び服部南郭と世説流行の関係は徳田武『大東世語』論（その一）―服部南郭における世説新語―（『東洋文学研究』十九、一九六九年）、同『大東世語』論（その二）―服部南郭における世説新語―（『中国古典研究』十六、一九六九年）、同『大東世語』論（その三）―南郭の人間認識と美意識―（『中国古典研究』十七、一九七〇年）に詳しい。徳田武論文にも、不学の南郭門人が「蒙求・世説・唐詩選」を読んだとする『文会雜記』卷二下の「記事を引く（その二、一六頁）」。
- (10) 長澤規矩也監修長澤孝三編『改訂増補漢文學者總覽』二〇一一年、汲古書院、三〇二頁。
- (11) 徳田武『江戸詩人傳』一九八六年、ペリかん社、八六〜二四四頁。
- (12) 日野龍夫『服部南郭伝攷』一九九九年、ペリかん社、三四八〜三四九頁。
- (13) 東京都立中央図書館特別文庫室蔵本小室文庫（七六九四）。但し刊記欠。国立公文書館本（三〇八一―一六七）は林九兵衛刊。
- (14) 立命館大学衣笠図書館蔵本（子一六〇）。錦山柚木先生著『世説新語補系譜 付歴代帝王系譜』全二冊刷刻の広告がある。
- (15) 『関西大学東西学術研究所資料集刊十一』三 事実文編三 一九八〇年、関西大学東西学術研究所。注9 高山大毅論文にも允明の『尺牘彙

材」とその人について言及がある。

- (16) 王能憲『世説新語研究』一九九二年、江蘇古籍出版社 七六頁。何故安永版本に限ったかは不明である。なお、東京大学東洋文化研究所蔵本(子一雜一4)の余圯孺刊本も七種の一つに挙げられている。七七頁。
- (17) 台湾大学中央図書館蔵本の焦竑の序は、王能憲氏所引と異文がある。また、李劍雄点校明焦竑撰『澹園集』(一九九九年、中華書局)所載「焦竑年譜」および「焦竑著述小考」には、この序のある『世説新語補』について言及がない。同年譜には、焦竑撰、万曆十九年焦竑序『四先生文範』の和刻本(寛保元年江戸谷村豊左衛門刊『和刻本漢籍文集』第十五輯、一九七八年、汲古書院 五四七頁)に言及して、これが確かに焦竑の手になるものかどうか、すこぶる疑わしいと述べている。熊耳山人は、題尾において、南郭が「蕉生(焦竑のこと)」の名高いのを利用したかと言ったことを紹介しているが、あるいは『世説新語補』の序も同様に焦竑の与り知らぬことであつたのだろうか。いづれにせよ、今しばらく考えたい。
- (18) 中国国家図書館蔵万曆十三年張文柱刻本『世説新語補』の凡例(『世説新語補凡例』)は、万曆十四年刻本の『李卓吾批点世説新語補』の凡例(『李卓吾批点世説新語補凡例』)と同文である。李卓吾の名を懸けたり外したりしていることがわかる。
- (19) 『中国古籍版刻辞典(増訂本)』二〇〇九年、蘇州大学出版社、一三八―一三九頁。
- (20) 以下、人物の情報については、今回組上に載せた『世説新語補』三本の諸家の書き入れを参照した。
- (21) 『荻生徂徠全集』第一巻所収(一九七三年、みすず書房、五三七頁)。「世説新語」はあげられていない。『何氏語林』と『万姓統譜』が「右好古之士必須貯置備博」、すなわち一歩進んだ者の備え置く参考資料にあげられている。

付記

『世説新語補』伝本の調査にあたって、関係所蔵機関に便宜を図っていただき、周以量(首都師範大学)、劉岳兵(南開大学)、太田登(台湾大学)、董崇驊(台湾大学大学院生)の皆様にご助力を賜りました。感謝いたします。

なお、小稿は平成二十四年度科学研究費補助金基盤研究(C)「『世説新語補』を事例とした近世日本の明清漢籍受容史の研究」(課題番号23520231)による研究成果の一部である。

【キーワード】

・ 那波魯堂 ・ 石島筑波 ・ 秋山玉山 ・ 戸崎允明 ・ 李卓吾